

はぶ はにゅう 羽生さんか羽生さんか

羽生善治九段と羽生結弦選手、同じ字なのになぜ読み方が違うのか不思議に思ったことはありませんか。他にも神戸など異なる読み方をもつ名前がありますね。

羽生の元の言葉はハニフで、本来は埴生、土生と書きます。ハニは粘土、陶土のことでこれで出来たものが埴輪です。フは「生える」と同語源で、芝生・笹生・篠生(信夫)・竹生(武生)・蒲生・菅生・荻生・稲生(稲尾・伊能)・粟生・瓜生・葛生・麻生(麻布・浅尾)・柳生・桐生・栗生・榛生(針生)など植物が生えている所を指しますが、丹生など鉱物が採れる所も指します。(丹は朱色の硫化水銀を言い、水銀の原料や顔料として昔から使われてきました。またニ自体に土の意味もあったようです。赤丹は赤色の粘土。「青丹よし」と言うのと色鮮やかな奈良の都の宮殿や伽藍を思いおこしますが、この枕詞は奈良が田舎だった飛鳥時代以前から使われており、青丹は岩緑青つまり炭酸水酸化銅を主成分とする緑色の孔雀石を指していたそうです。)つまり埴生は粘土、陶土の産地です。

ハニフのフが弱音化して(平安時代中期以降)ウとなり、次いでニウが拗音化して(鎌倉時代以降)ニユウとなるのは容易に理解できますね。羽生の字は当て字と思われる。ハネフなら拗音化するとハニョウになるはずですから。他に羽入という用字もあります。羽根尾などもその訛りでしょう。

次はハブという読み方の由来です。

鼻子音ナ行とマ行は、特に母音イやウが脱落しやすい傾向がありましたが、そうになると鼻子音が次の子音と合体して後の子音が濁音になります。ハニフ→(ハニフ)→ハブ というわけです。

埴生の字は、上総国と下総国にそれぞれ埴生ハブ郡があるなどハブの方が多いようですが、長野県千曲市や大阪府羽曳野市の地名や人名にハニユウと読むものもあり、富山県小矢部市の埴生ハニウは拗音化していない形です。土生の字はハブの読みがほとんどのようです。

この種の濁音化は連声濁と呼ばれ、他にも沢山の例があります。

東はヒムカシ→ヒガシ、山路はヤマミチ→ヤマヂ、網代はアミシロ→アジロ、硯は墨擦スミスリ→スズリ、札は文板フミイタ→(フミタ)→フダ、髪蔓はカミツラ→鬢カツラ、櫛はハニシ→ハジ→ハゼ、刀自は戸主トヌシ→トジ、連は群主ムラヌシ→ムラジ、賜ふはタマフ→タブ、思ほすはオモホス→オボス、ニテ→デ、ナニト→ナド、土師はハニシ→ハジ、物集はモノアツメ→(モノツメ)→モヅメ、弓削はユミケ→ユゲ、上総はカミツフサ→(カツフサ)→カツサ、大庭はオホニハ→オホバ、我孫子は網彦アミヒコ→アビコ(我孫子は大阪市住吉区の旧依網ヨサミ村にいた古代豪族依羅連の元の姓(かばね) 依網吾彦アビコに由来し、網彦は漁師の長、網元のような存在です)。信太シノタ→シダは両方(大阪と茨城)あります。名残は波残ナミノコリの鼻音が二つ脱落したのでしょうか。

m音が消えずにウとして残る場合もありました。

日向ヒムカ→ヒウガ、手向けタムケ→峠タウゲ、手水テミズ→テウズ、醸カモシ→麴カウジ、髪搔カミカキ→笄カウガイ、上辺カミヘ→頭カウベ、神代カムシロ→カウジロ、上野カミツケノ→(カウツケノ)→カウツケ。

後に日本語にン音が現れると、鼻子音もンとして残るようになりました。

髪挿カミサシ→簪カンザシ、弓手ユミテ→ユンデ、上達部カミタチメ→カンダチメ、蒲原カマハラ→カンバラ、茨田(万多)マムタ→マンダ→マッタ、丹波タニハ→タンバ。雉キギシ→キジ、藁沓ワラグツ→ワラウヅ、香しカグハシ→芳しカンバシはいずれもガ行ですが、同様の濁音化が起こっている点からみると n音だったかと思われます。

神戸カムヘは、ウが残るとカウベ、ンが残るとカンベとなります。(なお神戸には戸をトと読む、カンド、カウド、それが濁音化したガウドという読み方もあります。)神崎カムサキも同様に、カウザキとカンザキの読みがあります。神田カムダにはカダ、カウダ、カンダという読みがすべて揃っています。道も、mが消えると大路オホミチ→オホヂ、ウが残ると小路コミチ→コウヂとなります。ただし大路は室町時代までオホチと清音であり、ミチではなく路チに由来すると言われています(道は御ミ+路チ)。それ以外は東路、信濃路、木曾路、越路など古くから濁音だったようです。

蔵人クラヒトからクラウドとクランドという読みが生まれたのも同じように見えますが、こちらはヒがウと

ンに変わったことになります。商人アキヒトのアキウドとアキンドも同様です。客人マレビトとマラウドも似ていますが、後者はマラヒトの訛りで、前者と起源が異なるそうです。どうも、ヒトの付く言葉は規則がはっきりしません。旅人タビトはタビヒトが約まった形で領けますが、史（不比等）フヒトは文人フミヒトがフビトと濁っていません。首オビトは大人オホヒトが約まったものと言われますが、逆に濁っています。仲人ナカヒトや若人ワカヒトはナカウド、ワカウドと濁り、狩人カリヒト、寄人ヨリヒトも同様ですが、弟オトヒト、妹イモヒトと、素人シラヒト、玄人クロヒトは濁らず、ウに変わるだけです。夫ヲヒトや助人スケヒトは促音化しています。ヒト以外にも、水取モヒトリ→主水モンド、問屋トヒヤ→トシヤなど、ヒが撥音化する言葉があります。このように、ヒは濁音化など鼻音に似た性質がありますが、音声上なぜそうなるのかわかりません。連濁でまずビになるのでしょうか。

大阪の別名難波ナニハの語源は魚庭ナニハ、つまり漁場だそうです。（現在の難波ナンバは江戸時代には大坂の近郊農村で野菜の産地として有名でしたが、上町台地の難波京とは位置が異なり、直接の継承関係はなさそうです。）古代にはニハという語は作業場を意味したようで、単独でも猟場や調理場、神事や説教の場という意味で用いられていました。複合語の後半部の庭ニハ→バが後に独立して、場バという語ができたようです。

複合語の後部要素が濁音化する連濁も、この濁音化の類推から生まれたものと考えられています。助詞ノやナが脱落して濁音化する例が多くてそうなったという説もあります。言葉コトノハ→コトバ、渡辺ワタナヘ→渡部ワタベ。濁音は、複合語の内部境界を示す働きをしています。なお、連濁は古代からあったのですが、濁音は（日葡辞書以外では）表記されないことが多いので、連濁がいつ一般化したかははっきりしません（旧村名の読み方の研究によれば、明治初期には連濁しない方が多かったのが、現在では連濁するケースが大幅に増えており、近代になって規範化が進んでいるようです）。連濁は並列構造では起こらないのが普通です：山川、草木。また後部要素が濁音を含んでいる場合は起こりません：春風（例外、縄梯子）。漢字語では前の字が鼻音・n、・m、・ŋで終わる場合に起こりやすくなります。韓国語で破裂音のうちkなどの平音とkhなどの激音が語頭では清音に、語中では濁音に発音されるのと似ていますが、韓国語は音節レベル、日本語は単語レベルで起こる点が違っています。母音間の無声音が弱化して有声音になる現象は一般によく見られます。

ラ行のリにも鼻子音と似た濁音化の働きがあります。これは、rやlが流音と呼ばれ、鼻音に劣らずsonorityが高く、すなわち母音に近い性質があるとされているからだと思われまゝ。たとえば古代インドではrやlという母音がありました。またグルジア語でgybrdyvnis、スロベニア語でskrbstvoなど5個以上の子音が連続する言葉がありますが、その中の流音が母音の役割をしています。

渡殿ワタリトノ→ワタドノ、後月はシリツキ→シヅキが後にシツキと清音化したものかと思われまゝ。榛沢ハリサハ→ハンザハ、榛谷ハリガヤ→半ヶ谷ハンガヤ。

rが脱落し母音が残った形もあります。榛原ハリハラ→ハイバラ。濁音化を伴わず、リなどラ行がンになる例もあります：掃部カニモリ→カモン。アルメリ→アンメリなどの助動詞やワカンナイなどの口語でもよく見られます。

破裂音のタ行、ハ行、カ行の母音が脱落すると促音になります。促音化はタ行、サ行、ハ行、カ行の前で起こります。

新田ニフタ→(nipta)→ニッタ、新堀ニヒホリ→日暮里ニッポリ、尊シタフトシ→タットシ、（八田ハチタ→ハッタ、八朔ハチサク→ハッサク、六角ロクカク→ロッカク）。

リも促音化することがあります。この現象はrの発音部位がtなどに近いからかもしれません。鳥取トリトリ→トットリ、刈田カリタ→カッタ、治田ハリタ→ハッタ、取手トリテ→トッテ、鶏冠トリサカ→トッサカ→トサカ。薬師クスリシ→クスシ、宣ふノリタマフ→ノタマフや楓カヘルデ→カヘデは、単にリヤルが脱落したもののようには見えますが、促音化の過程を経ているかもしれません。

古代日本語には、他にもいくつかの音韻規則や習慣があったので紹介しておきましょう。

○音節はすべて母音または子音+母音で構成されますが、母音の連続は許されません。

明石アカイシ→アカシ、麻績ヲウミ→ヲミ、手洗タアラヒ→盥タラヒ、宍粟シシアハ→シサハ、淡海(近江)アハウミ→アフミ、常盤トコイハ→トキハ、我妹ワガイモ→ワギモ、紅クレノアキ→クレナキ、金打カナウチ→鍛冶カヌチ→カヂ、差し上げるサシアゲル→捧げるササゲル。

この縛りがなくなった後世に母音が復活した例も沢山あります。
末羅マツラ→松浦マツウラ、高師タカシの浜→高石タカイシ、直入ナホリ→ナホイリ。

前後のどちらの母音が省略されるかは特に規則はないようです。河内国の読みは元はカフチでしたが、後にカハチに変わりました。

母音が融合する場合もあります。

i+a>e : 浮穴ウキアナ→ウケナ、a+i>e : 長息ナガイキ→歎息ナゲキ、i+o>e : 韃負ユキオヒ→ユケヒ、日置ヒオキ→ヘキ、o+i>e : 殿入トノイリ→舎人トネリ、a+o>e : 長押ナガオシ→ナゲシ。

○ラ行と濁音は語頭に立てません。

濁音で始まる大和言葉は語頭の母音が脱落してできたものです。

茨イバラ、ウバラ→薔薇バラ、抱くイダク→ダク、伊達イダテ→ダテ、出羽イデハ→デハ、イヅク→ドコ、イヅレ→ドレ。

Russiaのことをかってヲロシアと呼んでいましたが、モンゴル語で Oros、ウズベク語で O'rusiya、ハンガリー語で Oroszországとやはり語頭に母音を置き、中国語でも俄羅斯と言っています。(余談ですが、樺太で抑留されていた祖母はロシア人 *русский*のことを露助と言っていました。)

○名詞には独立形の他に複合語を作る際に使われる語幹があるものがあります(母音交替)。

e<a : 手<手綱、目<目蓋、胸<胸毛、雨<雨戸、天<天下り、風<風上、酒<酒杯、船<船乗り、上<上着、稲<稲穂、金<金物、爪<爪楊枝、声<声色、群<叢雲ムラクモ、竹<篁(竹叢)タカムラ、菅<菅原、(三)宅<家持

i<u : 神<巫カムナギ、口<嚮クツワ、身<軀ムクロ、月<夕月夜ユフヅクヨ

i<o : 木<木立、火<炎ホノホ、黄<黄金

o<a : 白<白髪

足搔く、胡坐(足座)、鐙(足踏み); 水面、港(水門)、源(水元); 海面、海原、海上はアシ、ミヅ、ウミとは異なる形が昔はあったのでしょうか(港などのナはノの異形)。

春雨、村雨、秋雨、氷雨、小雨、霧雨のサメは、交替形ではなく、真青マッサオ: 粳稻ウルシネ、春米ツキシネ: 堅磐カタシハ: 三朝ミササなどと同じく s音の挿入とされているようです。サハニ(多く)は単独形でアハニの形でも現れます。この他、新嘗ニヒナへ→ニヒナメ、味織(味凝)ウマコリなども、それぞれ n、k 挿入の可能性があるのであります。

○母音は5種ではなく、イ・エ・オ段が甲乙2種あり(上代特殊仮名遣)、母音調和の現象があったらしいです。

○ワ行のヰ、ヱ、ヲ、さらに古くはヤ行のye(江)がア行(枝)と区別されていました。

○撥音ン、促音ッ、拗音ャユョはありませんでした。